召喚師のヒエラルキー

根津地　陽山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
召喚師のヒエラルキー

【Ｎコード】
Ｎ２７７７Ｙ

【作者名】
根津地　陽山

【あらすじ】
陰陽師の和樹は父親から送られてくる魔道書をいつもどおり、自宅にしまっていた。そんな時、召喚についての魔道書といっしょにある宝具が送られてくる。そして、それと関係するように自分を宝具の最上級のヒエラルキー……神器となのる少女が現れる。そして、和樹は召喚師同士の戦争に巻き込まれて行く

1ー1（前書き）

いつもより、スローペースでかけた。（いつも急展開なんで）
でもここにはほとんど投稿しないからいつもどんな感じの小説かはみんなしらないけどね。

1-1

日曜日という学生にとっては、一週間の学校から開放された祝福の日であって、遅くまで寝てたいのに神木和樹（かみきかずき）は七時に起きてしまった。

それも、そうだろう。先程からずっとこの、ほぼ学生寮化したアパートの自分の部屋から玄関のインターホンの音が五分ぐらいなっているからだ。

そして、諦めたようにインターホンの音が消えると玄関の出口になにか、ドサッと何かものが置かれる音がする。

一番奥の部屋でベッドで寝てた夜行にも聞こえるのだから結構重いものなのかもしれない。

「まさか……」

とあせったように、ある可能性が和樹の頭のなかによぎる。

ベッドから出ると急いで玄関に向かい外にでる。

案の定、そこには和樹が予想していたダンボールと宅配便の薄っぺらい紙が貼ってある。

中身は見なくてもわかる。大量の本だ。それも、ただの本ではない。魔術書と呼ばれる、魔術について書いた本だ。普通、そんなものは漫画やアニメの世界だけだと大抵の人は思うだろう。だが、魔導書を見た人はそれを魔術書だと信じるだろう。

魔導書を見た人ならわかるが、魔導書からはまるで意志があるかのように何かを感じれる。

そして、実際にダンボールからは不気味な何かを発している。

「仕方ない」

和樹はため息まじりに呟くとダンボールを持ち上げアパートの階段を降りる。思った以上に重量があり、階段を下る足取りは慎重になる。

階段を降りると、近くにあった自分の自転車の後ろにダンボール

をのせ、落ちないように伸縮できるゴムバンドで頑丈にしばる。
パジャマのままだったが、まだ朝でそんなに人がいるわけでもないので着替えもせずに和樹は自転車をこいでいく。

自転車をこいで十分。ある一軒家にたどり着く。そしてその家の表札には神木とかかれている。
ここは和樹の家だ。だが、家族は一人もすんでいるわけではなく、ほぼ空家だ。
自転車からダンボールを持ち上げ玄関の入口まで運ぶ。
鍵を取り出し扉を開け、ダンボールを玄関の前に置く。
どすっと、重そうな音をたて、ダンボールを開けていくと分厚い本が五冊入っていた。
それらをダンボールから取り出すとそれをもち、ある部屋に進んでいく。
部屋の中は書斎で本棚には二千冊の本がぎっしりと詰められている。それらはすべて、魔導書や魔術についてかかれて資料だ。
和樹は空いた本棚に本を綺麗に収める。
玄関に戻りダンボールをくずそうとすると、なかに何か入っている。
「なんだ、こりゃ」
ちょうど握りこぶし三、四個ぐらいの長さで全て漆黒の色に包まれている。刀の柄にもみえなくはない。
そのときだった。家の電話のベル鳴った。
普段和樹の家はだれも居ないので、ここに電話をかけてくる相手は一人しかいない。
電話をとりにリビングに出る。
「なんだよ、親父」
「お、なんでわかったんだ」
「ここはいつもあけてるからな。電話がかかってくるなら、身内。

さらに魔術書の資料やらが送られてきたこのタイミングで電話がかかってくるってことはあんただろ」
「よくわかったな」
和樹のアパートの前に魔導書やらを送ってくるのは和樹の父親だった。
「ところで質問なんだけど、あの黒い棒はなに？　何か刀の柄にも見えるけど」
「ああ、あれか。……あれは宝具だ」
「宝具？　なんで宝具なんか」
「必要になるんだよ」
急に和樹の父親の声の真剣味が変わる。
「黒漆（こくしつ）ノタチが必要になる」
「はっ。どういうことだよ」
「今日送られてきた本に詳しいことは書いてある。全部読めよ」
といって、和樹の父親は電話を強引に切ってしまった。
和樹は受話器を置き、書斎に戻る。
とりあえず、今日送られきた本を五冊を本棚から抜き取るとガラステーブルにおきソファに座り、一冊だけ手に取る。だが、その本は和樹が知っている魔術書の不気味な感じがしない。多分魔術の核心部分ではなく魔術の仕方だけを書いた魔術関連の資料だろう。
何も表紙には書いてなく、仕方なく表紙をめくる。
書かれている文字は英語だった。かといって和樹には読めないわけではない。小さい時から英語の魔導書を読んだこともあるし、大きい休みの日などは家族と海外にいったりしていたのでそれなりに英語に自信がある。
そして、ページの真ん中にはどんな内容の本か英語で書かれていた。
――――ｉｎｖｏｃａｔｉｏｎ（召喚）

その文字を見た瞬間、和樹は父親が言っていた。「必要になる」という意味がわかった気がする。

まだ、何もめくってないが、別の魔術関連の資料を読んで召喚がどういうものなのかを知っている。

魔方陣を書き、人間というヒエラルキー（階級）より上位な天使や神々を人間が感覚として取れるとところに呼び出す。それが召喚だ。

そして、その召喚された天使や神を宿した人間が力をもち暴走するのを抑えるために宝具と呼ばれる伝説の武器がある。ロンギヌスの槍（竜殺しの槍）、アスカロン（血迷いの剣）、ダーインスレイヴ（運命）どれもが神話や伝説にでてくるものが元である。

だが、その宝具を手にしてどうするのだと夜行は思う。

何かくい止めろとでも言うのだろうか。

「まさか、俺に召喚をさせる気か」

おもいついたことを呟く。

別の積み上げた本を取る。そしてそれを手にした瞬間、急な吐き気が和樹を襲う。

「うっ……っっ」

瞬時に手で口を覆い、耐える。やがて、それが手にした魔導書の影響だとわかると一旦、和樹は手を放す。

そして、ソファに座り落ち着いたとこでもう一度、魔導書を手にする。

1ー1（後書き）

とりあえずバトルは後三話後ぐらいに

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2777y/

召喚師のヒエラルキー

2011年11月15日03時20分発行